優秀賞論文要旨

エドガー・アラン・ポーの「アッシャー家の崩壊」における家父長制批判

―マデラインを通して

石　村　玲　子

エドガー・アラン・ポーの「アッシャー家の崩壊」は1839年に発表された短編怪奇小説である。本論では、この「アッシャー家の崩壊」の女性登場人物であるマデラインを通して、本作品をジェンダーの視点から考察する。特に「アッシャー家の崩壊」において、家父長制を敷いているアッシャー家と、その家父長であるロデリックがマデラインによって破滅させられることに注目し、その意味を考査する。

そして、「アッシャー家の崩壊」において、マデラインがロデリックを滅ぼすことには、本作品からアメリカ家父長制における女性観への批判が読み取れることを論証する。

まず、マデラインに深いつながりがあるアッシャー家とマデラインの双子の兄であるロデリックの特徴について確認し、本作品におけるマデラインの役割や立場を明らかにする。アッシャー家は、家父長制のもとに存続してきた由緒ある芸術家の家系である。ロデリックはアッシャー家の家父長である。このことから、ロデリックの家父長としての義務は、芸術を創作することであることがわかる。

次に、アッシャー家におけるロデリックとマデラインの関係を、「アッシャー家の崩壊」が発表された19世紀アメリカのジェンダー観と照らし合わせて考察する。本作品において、マデラインはロデリックの芸術活動を支える存在であ

る。マデラインが家父長であるロデリックを支えることは、間接的に家父長制をしいているアッシャー家を維持することになる。こうしたマデラインの特徴は、19世紀アメリカの家父長制社会のもとにつくられた女性観と重なっている。また、アッシャー家、ロデリックとマデラインの関係は、19世紀アメリカの家父長制と家父長制を支える女性の関係と合致しているといえる。

さらに、作中におけるマデラインの埋葬には、家父長制の犠牲としての女性があらわされていることを論じる。そして、埋葬されたマデラインがロデリックを破滅させるという展開から、アメリカ家父長制における女性観への批判が読みとれることを明らかにする。マデラインの埋葬は、滅びゆくアッシャー家の有終の美を飾るため、ロデリックが自ら行ったことである。ロデリックは、芸術家の家系であるアッシャー家の家父長の最後の務めとして、アッシャー家の最期を自ら演出した。芸術家であるロデリックが自らアッシャー家を崩壊させることは、アッシャー家の崩壊はロデリックが自ら創作する一つの作品であることを意味する。そして、マデラインがロデリックによって家父長制の有終の美を飾るために埋葬されることは、女性が家父長制の犠牲となっていることをあらわしている。しかし本作品の終盤で、埋葬されたマデラインはロデリックを破滅させる。マデラインは、ロデリックの芸術を支えていた、いわば、芸術の共同制作者である。そのような役割を持っていた彼女がロデリックを滅ぼすことは、アッシャー家の崩壊という作品の一部にされたことへの復讐であり、アッシャー家の崩壊を劇作する主導権を奪い返したことを意味すると考察できる。

以上の議論から、19世紀アメリカの女性観に合致したマデラインが家父長であるロデリックを滅ぼすことからは、「アッシャー家の崩壊」には19世紀アメリカ家父長制における女性観への批判を読み取ることができる。